

～二羽のイヌワシ～

小 松 守

（秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～園長）



いつもの冬なら園内には春近しとばかり「キャンキャン」とか「ヒューン、ヒューン」というイヌワシの恋鳴きが響くのだが、今年は静かだ。30年近く連れ添ったイヌワシ夫婦の雄・信濃が昨年亡くなり、雌のたつ子は寂しそうだ。春告げの恋鳴きが聞こえず私も寂しい。

半世紀近く、多くのイヌワシを見てきたが、私には特別な二羽がいる。雄の鳥海と雌の白滝、ともに鳥海山麓での保護個体だ。特に鳥海は人なつっこいイヌワシで、白滝が19歳で亡くなった後も47歳まで生きてイヌワシの最高齢記録をつくった。

まずは二羽の出自から紹介する。1970年7月上旬、鳥海山の秋田県側、ある溪谷で行われていた砂防ダム工事現場の林道脇で飛べずにいたイヌワシのヒナが中一日おいて二羽発見された。工事に従事する地元の人が自宅で懸命の救護にあたった。動物好きのやさしい人で、自宅に持ち帰り、熱心なやさしい飼育をしたそうだ。そのことを話してくれたのは鳥海が亡くなった時、動物園に献花に訪れたその方の奥様だった。

後の調査で保護地点の上約100mにイヌワシの営巣岩棚が発見された。鳥海山でのイヌワシ繁殖の初確認だったらしい。

イヌワシではヒナが二羽育ち、巣立つことはまれである。このイヌワシの不幸な巣立ち失敗は、偶然の発見と必然の救護で二羽が生き、後に動物園飼育となり、イヌワシの生息域外保全に結びついたとも言える。適切な救護飼育で元氣になった二羽は同年8月、当時の秋田市の千

秋公園の児童動物園に引き取られ、そこから動物園生活が始まった。

1965年、イヌワシは国の天然記念物に指定されたこともあり、1969年には九州阿蘇山で救護された一羽は熊本市動物園に、宮城県での一羽は上野動物園にそれぞれ保護された。翌1970年には秋田でも二羽の飼育が始まった。ただ、その後イヌワシ飼育を50年以上継続してきたのは秋田の動物園だけである。

3年後、二羽は大森山動物園に移された。普通の鳥は長屋形式での飼育だったが、天然記念物の二羽は特別待遇で園南端の山の際、静かな場での戸建てのイヌワシ舎だった。

動物園に入った頃の私はイヌワシに特別な関心はなかったが、1979年の出来事は私の思いをガラリと変えた。イヌワシが産卵したのだった。当時の園はイヌワシを繁殖させたいという思いは希薄で、十分な巣作り環境の提供などできていなかった。卵は舎の床面コンクリートの上に産み落とされていたのだ。産卵に皆驚き、オロオロしたような記憶がある。

イヌワシへの関心、興味が突如湧き起こった私は、初めて触れた卵のがっしりした質感にイヌワシの力強さを感じ、冷え切った卵の触感は不安の中で産卵した白滝の気持ちを思うと申し訳ない気分にもなったことを思い出す。

貴重な卵であり、ダメ元で孵卵器に入れることにした。卵を調べてみて、微かなヒビを発見し落胆したのを覚えている。硬い床に産み落とされたからだろう。誰かがセロハンテープを持っ

てきてヒビに貼り付けた。笑い話的だが皆必死だった。卵は無論孵化しなかった。

この時からイヌワシの繁殖は私の大事なテーマになった。国内動物園での繁殖例もなく、繁殖生態も分からない時代だった。海外文献も参考に、イヌワシを自分の目で見てやろうと計画した。イヌワシと真正面から向き合ってもみたかったのだ。イヌワシの繁殖期は厳冬期の一度だけだ。餌の豊富な春にヒナを孵し育てるため、逆算すると繁殖行動は冬、その観察が大事だった。

翌年の繁殖期、交尾行動と鳴き声の関係を調べた。調査フォーマットを考案、時間をつくっては観察し記録し続けたことを懐かしく思う。今のようにモニターカメラなどもなく、自分の目と体を張るしかなかった。厳冬期の屋外観察は予想以上にきつかった。いい防寒具もまだホッカイロもない時代、イヌワシ舎前で自作の段ボール製テントに身を隠し、防寒しながらの観察であった。毎日の観察で様々なことが分かったし、毎日向き合い鳥海や白滝を知るほどに愛着が深まった気がした。実は鳥海と白滝の名はこの時に私がつけたのだ。

イヌワシの繁殖行動は序曲のように二羽の「コウコウ」と囁く鳴き交わしから始まり、冒頭に紹介した恋鳴きへとしだいにエスカレートしてゆくのだ。鳥海の鳴き声が「キャンキャン」と甲高くピークに達すると交尾行動を見せ、クライマックスを迎えることが分かった。もう一つ分かったのは白滝の鳴き声と行動がなぜか途中から鳥海とはシンクロナイズせず、そこから交尾のミスマッチが起きていたことだ。このままでは繁殖できないことが分かった。

翌年の繁殖シーズンに向け、家禽の研究者にも相談、有精卵を得るための採精研究を行った。海外文献も読み、鳴き声をもとに交尾行動を見抜き精子の安定採取を試みた。人なつっこい鳥海は保定にも協力的で、精液採取がスムーズに

できた。顕微鏡での精子確認、その写真記録も残せた。国内初の精子確認、鳥海のおかげだ。

次の難問は、精液採取と人工授精のタイミングをどうするかであった。文献上では産卵72時間前の授精が適期とあったが、繁殖期の産卵が二個だけのイヌワシでタイミング探しは至難の業だった。思いついたのは白滝から卵採取し続ける補卵性を利用することだった。全6個を産ませることができ、人工授精の回数が増え、何度か注入を試みたが残念ながら実らなかった。

その後、人工授精は他の個体に引き継がれ、人工孵化で胚発生までこぎ着けることができたが、ヒナ誕生にはつながらなかった。課題が多いこの計画は断念することにした。協力してくれた白滝は数年後に翼の骨折が元で亡くなった。彼女には大きな負荷をかけてしまったのか。悲しいイヌワシの思い出でもある。

イヌワシ飼育の始まりの時代にイヌワシと向き合った飼育経験は無駄ではなかった。冒頭紹介した信濃とたつ子とのペアづくりでの自然繁殖では、様々な失敗、成功の経験は大いに活かされ、今では大森山動物園は全国の動物園の中でイヌワシの飼育で高い技術を持つ繁殖基地的役割も担う動物園に成長できたと思う。鳥海と白滝がくれた貴重な機会だったのだ。

森の王者らしい威厳と強さを見せ生き続けた鳥海は、救護してくれた人のやさしさを沁み込ませながら、恋鳴きの魅力も教え、飼育に協力してくれたやさしい鳥だった。鳥海は2016年、園施設内で高病原性鳥インフルエンザが発生した時もしっかり生き続け、大森山の鳥を守ってくれた。動物病院で余生を過ごしていた鳥海を担当した獣医さんが彼を「鳥海さん」と呼んでいるのを見て、本当にナイスガイなんだなと思った。

イヌワシ飼育を見守ってくれた鳥海は今、大森山動物園ゲートに永遠のいのち、ガラスのアート作品となって動物園を見守ってくれている。